

学 位 論 文 要 旨

氏 名 鎌田 明美

題 目 中学校国語科における絵本の読みあいの教育効果の研究

本研究の目的は、中学生を対象として、国語科教育において絵本の読みあいがもたらす教育効果を検討することにある。中学校国語科授業において、読書材として物語絵本（以下、物語絵本を絵本とする）を用い、読みあいを言語活動として導入するという方法で実践し、研究を進める。

1章では、読書材としての絵本を検討した。絵本の絵が果たしている役割としては、言葉は空間をただ描写することであるのに対し、絵は実際にかたちを見せ、言葉よりもずっと効果的に示せることである。それゆえ、読者が絵本を読むときは、言葉から絵に目を移し、また絵から言葉に目を移し、言葉と絵のあいだを行き来することによって、言葉と絵の両者が結びつき、理解の幅がしだいに広がっていくことを示した。絵本の設定として、言葉と絵のあいだのちがいがから生まれる謎を解き明かそうと読者が何度も読み返して、夢中になるような仕掛けが仕込まれている。しかし残念ながら、絵本を中学生の読書材とすることに関しては、普及していない。絵本のなかには、中学生を含む13歳頃から19歳頃の子どもから大人に成長する時期に相応しい作品も数多くつくられていることから、中学生を対象とした絵本研究は希少ではあるが、推奨していくべきものであるということを示した。

2章では、絵本の読みあいによる解釈（読解）する力の育成【研究1】として、中学生を対象とした国語科授業において、読書材として絵本を活用した相互的な読書である読みあいを導入して、学習者の解釈（読解）する力についての変化を検討した。読みあいの回を重ねる度に、学習者の読みの変化が窺えるようになった。読みの変化は、学習者個別で細かいところに違いがあるものの、人物像や物語の全体像への読みが高まったり、場面や人物の心情について描写と結び付ける解釈へと広がったりした。その結果、ルーブリックによる分析だけではなく、事例分析からも、自分の知識や経験と結び付けた解釈への広がりがみられた。また、人物像や全体像を捉えた解釈への広がりも確かめられた。そして、単元終了後、学習者に求めた感想の記述によると、絵本の読みあいによる読むことへの意欲に関することや読みの深まりを捉えたことがみられた。

3章では、絵本の読みあいによる選書意識の育成【研究2】として、中学生を対象とした国語科授業において、読書材として絵本を活用した相互的な読書である読みあいを導入して、学習者の選書意識についての変化を検討した。読みあいの活動を継続するなかで、学習者の選書意識の変化が窺えるようになった。選書意識の変化は、学習者個別で差があり、変化は一様ではないゆえ、細かいところでは異なる点が生じているが、事例分析でみると、相手への思いや

心遣いがしだいに強く働くようになったことによる変化、自分嗜好中心の選書意識が相手に対する選書意識へと形成されていったことによる変化、絵本の読み聞かせで相手に分かりやすく伝えようと相手意識が強く働くようになって、音読や聞き方の工夫をしたことによる変化が示された。そして、単元終了後、学習者に求めた感想の記述によると、絵本の読みあいによる選書意識の高まりに関することがみられた。

4章では、絵本の読みあいによる傾聴態度の育成【研究3】として、中学生を対象とした国語科授業において、読書材として絵本を活用した相互的な読書である読みあいを導入して、学習者の傾聴態度についての変化を検討した。読みあいの活動を進めていくと、学習者の傾聴態度の変化が窺えるようになった。傾聴態度の変化は、KJ法分析によると、4月時点では「傾聴」と捉えた「真剣に聞く」か、もしくは「集中して聞く」の意味が示された記述のいずれかだったが、2月時点は、「傾聴」と捉えた「真剣に聞く」から「真剣に集中して聞く」の意味が示された記述へと変化してきた。さらに、KHCoderを用いた分析では、学習者の記述から「聞く」に言及したものを抽出し、このうち「聞く・真剣」の観点に照らしたものをみると、学習者の記述の表記は異なるものの「真剣に聞く」という意味が示されていた。すなわち絵本の読みあいの前提に「傾聴」の姿勢が整ってきていることが窺える。

5章では、中学生を対象とした国語科教育における絵本の読みあいがもたらす教育効果とその意義について、明らかにした。中学校国語科授業のなかでの絵本の読みあいを資質・能力（「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）の枠組みから解釈すると、三つの資質・能力が関連し合って育成されたことが確認された。また、資質・能力の枠組みから解釈して教育効果を捉えてきた本研究は、コンピテンシーベースの授業として捉えられ、中学校国語科だけに留まることなく、さまざまな教育活動に影響を与えられることが考えられる。今後は国語科の別の学習活動や他の教科等の学習活動への転移も視野に、質の高い協働的な学びを展開し、主体的・対話的で深い学びのよりよい授業改善を促すような実践を進めたい。

本研究では、中学生を対象とした国語科授業のなかの読書指導として、絵本の読みあいが解釈（読解）の力、選書意識や傾聴態度を育成することに繋がることを明らかにし、解釈（読解）の力という読むことの知識・技能に留まらず、選書意識や傾聴態度という関心・意欲・態度も、一揃いとなって発揮され、学習者自身の定着に繋がり易いという結論を得た。本研究は、従来、主に幼児期の読書材と考えられがちであった絵本の可能性を中学生の読書指導において見出し、その読みあいによる国語科授業モデルを開発・提示した意義を有する。